



★★★★★

ザ・クリエイター 創造者

2023年／アメリカ映画

配給：ウォルト・ディズニー・ジャパン／133分

2023（令和5）年11月3日鑑賞

TOHOシネマズ西宮OS

Data

2023-135

監督・製作・原案・脚本：ギャレス・エドワーズ
出演：ジョン・デヴィッド・ワシン
トン／渡辺謙／ジェンマ・チ
ヤン／マデリン・ユナ・ウォ
イルズ／アリソン・ジャネイ
／スター・ジル・シンプソン／
アマール・チャーダ=パテル

みどころ

クエンティン・タランティーノ監督が“日本オタク”であることは有名だが、近未来の“AIと人類との戦争”をテーマとした本作の舞台を“ニューアジア”とし、渡辺謙をAI軍のリーダーに起用した本作の監督・製作・原案・脚本を務めたギャレス・エドワーズ監督も、相当なそれ！

『スター・ウォーズ』シリーズと共に育った同監督にとっては、『GODZILLA ゴジラ』（14年）の撮影と監督が必然なら、少女の姿をした超進化型AI“アルフィー”や、模人造人間“シミュラント”的撮影も必然だろう。

米国兵士の主人公がヘリに乗って“敵地”に乗り込む姿は、1970年代のベトナム戦争を描いたさまざまな名作を彷彿させるが、“アルフィー”的暗殺というとんでもない命令は、ホントに遂行できるの？それは所詮無理な相談で、これでは、「AIを敵視する西欧諸国」VS「AIとの共存を目指すニューアジア」との二極分化と泥沼戦争が永遠に続くのでは？

AIの実力は図碁界、将棋界では既に実証済み。またチャットGPTの世界でも、フェイクニュースを典型とするSNSの世界でも、AIの力はますます強力化している。11月8日の先進7か国（G7）競争当局の会合で採択された共同声明でも、巨大IT企業によるAI支配に対する当局の危機感が浮き彫りになった。そんな時代状況下に登場した、本作は必見！本作の問題提起をしっかりと受け止めたい。

———— * ————— * ————— * ————— * ————— * ————— * ————— * ————— * —————

■□■全世界でAIリスクの認識を共有！そんな日に本作を！■□■

2023年11月4日（土）の新聞各紙は、AIに関する2つの記事を掲載した。第1は、11月2日にロンドン近郊のプレッチャリーで開かれた英政府主催の「AI（人工知能）安全サミ

ット」の記事。そこでは、「28カ国と欧州連合（EU）が合意して「ブレッチャリー宣言」を出し、最先端のAIのリスクに関する認識を共有するという最低限の目的は果たしたが、世界規模の枠組み作りには時間がかかりそうだ。」と書かれていた。

第2は、生成AIで作成された、背広を着て、ネクタイを締めた岸田首相が、視聴者に対して卑猥な発言をしている偽動画が「ニコニコ動画」に投稿され、SNS上で出回ったという記事だ。製作者は「風刺のようなもの」と語っているそうだが、冗談じゃない！名譽毀損の恐れはもとより、「偽・誤情報の流通により社会の分断が生じ、民主主義の危機につながるおそれがある」と考えるべきだ。

そんな記事を読んだ当日、私は、チラシに「これは映画か、警告か？」「AIが、愛や憎しみを知る日は近いかもしれない。」と書かれた本作を鑑賞！

■□■このオタク（？）に注目！ギャレス監督の映画作りは？■□■

本作は、『GODZILLA ゴジラ』（14年）（『シネマ33』254頁）と『ローグ・ワン／スター・ウォーズ・ストーリー』（16年）（『シネマ39』未掲載）で一躍有名になったギャレス・エドワーズ監督の最新作だ。彼は『スター・ウォーズ』（77年）シリーズと共に子供時代を過ごし、12歳の頃に買ってもらったビデオカメラを片時も手放すことなく、当然のように映画監督を志し、コンピューターや視覚効果の仕事に従事する中、最初の『モンスターーズ／地球外生命体』（10年）の監督でデビューしたそうだ。私は映画撮影の技術や撮影方法と予算との関係はわからないが、かつての黒澤明監督の撮影方法によれば莫大な撮影費用がかかるのに対し、ギャレス監督流のパソコン上の映像技術を使って、必要最小限のビデオカメラによる撮影によって映画を作れば安上がりなことぐらいはわかる。

リアルな殺陣やド派手なアクション、さらに大人数による合戦シーン等をパソコン画面上で作り出すのは難しいかもしれないが、自由に創造すればいい（だけ）「SFモノ」はその点、容易なはずだ。『スター・ウォーズ』シリーズはもちろん、『2001年、宇宙の旅』（68年）、『ブレードランナー』（82年）等の「SFモノ」大作は莫大な製作費をかけたそうだが、何と本作の製作費は1億ドルを切っているらしい。

クエンティン・タランティーノ監督は“日本オタク”として有名だが、ギャレス・エドワーズ監督もAIオタクだけでなく“日本オタク”であることを、私は本作ではじめて知った。そのため、“ニューアジア”という壮大な世界観の提供をはじめ、渡辺謙の起用や、彼への日本語のセリフの提供等々に、ギャレス監督の“世界観”が示されているので、それに注目！なお、本作のパンフレットの冒頭にはギャレス監督の「STATEMENT」が4頁に渡って掲載されているので、これは必読！

■□■主人公は？ニューアジアでの潜入捜査は？その結末は？■□■

本作の主人公は、2065年の今、ニューアジアでの“潜入捜査”的任務に就いているジョシュア（ジョン・デヴィッド・ワシントン）。彼の任務は明らかにされないが、この時点で

は、アメリカをはじめとする西欧諸国はAIを危険視し完全禁止していたが、アジア圏ではAIテクノロジーの開発を継続し、“シミュラント（模造人間）”と呼ばれる、人間のようになったAIの恩恵を享受しながら共存していたらしい。つまり、2022年2月24日のロシアによるウクライナ侵攻以来、西欧民主主義諸国 VS 専制独裁国家の対立が顕著になっているが、2065年の近未来では、AIを巡る西洋と東洋の対立が激化するとともに、10年にわたる人類とAIとの強烈な戦いが続いているということだ。

そんな状況下、突然起きた西欧側からの攻撃によって、潜入捜査中のジョシュアは妻のマヤ（ジェンマ・チャン）とはぐれてしまい、マヤの死を確信した彼は、アメリカに帰り、精神的にボロボロになってしまふことに。もちろん、これは本作の導入部に過ぎないが、さあ、ここから、「AIと対立する西欧諸国」VS「AIと共に存するニューアジア」の戦いは如何に？

■■■アルファ・オーなる兵器は？ニルマータなる創造者は？■■■

それから5年後、ジョシュアに新たな任務を授けるのは、女性ながらアメリカ軍の大幹部になっているハウエル大佐（アリソン・ジャネイ）だ。彼女はジョシュアに対して、ニューアジアを戦争に勝たせることのできる兵器“アルファ・オー”を作り上げたという“黒幕の創造者”“ニルマータ”的所在をキャッチしたことを説明し、ニルマータの暗殺と兵器破壊の任務に参加することを要請した。ここらは『ランボー』映画の導入部とそっくりだが、マヤの喪失が心の傷となっていたジョシュアがそれを聞き、ランボーや木枯し紋次郎と同じように「あっしにはかかわりのないことござんす。」とばかりに拒否したのは当然だ。ところが、マヤがまだ生きていて、あの戦場にいるかもしれない、と告げられたジョシュアは、仕方なくそのミッションへの参加を決めることに。

ハウエル大佐以下の部隊が、AIがうごめくニューアジアの現地に潜入する姿は、ベトナム戦争を描いた数々の名作のシーンを彷彿させるものだ。いくら最新のヘリに乗って最新の兵器を持っていても、更に、いくら補給体制が完備されていても、何が待っているかわからない現地（敵地）に乗り込むのは不安なものだ。ベトナム戦争で、アメリカ軍は“ベトコン”と呼ばれた兵士たちの“ゲリラ戦術”に苦しめられたが、さて、ハウエル大佐たちの部隊は？武器や火力で圧倒的に勝る米軍は、“ニルマータの暗殺”という任務遂行のために進撃を続けたが、ジョシュアはそこで、“破壊すべき兵器”とされていた存在が愛らしい少女の姿をした超進化型AIのアルフィー（マデリン・ユナ・ヴォイルズ）だということを知ってビックリ！この現実をどう把握し、どう理解すればいいの？それはAIの専門家ではなく、軍人にすぎないジョシュアにはわかるはずのないことだったが・・・。

■■■AIの実力は人間超え！脅威は間近に！人間との共存は？■■■

私は中学生の時に将棋が大好きになったが、大山康晴・升田幸三時代はもとより、中原

誠・米長邦夫時代も、谷川浩司時代も、そして羽生善治時代も AI は存在しなかった。しかし、ついに藤井聰太八冠が登場した 2023 年の今、AI はすでに棋士（人間）の実力を凌駕している。それは囲碁界も同じだ。そのため、毎週日曜日に放映されている NHK 杯トーナメントでは、一手指す（打つ）ごとに、AI での勝率予想が示されている。

他方、SNS の分野での AI の進出もすごいもので、一方ではチャット GPT の誕生が話題を呼び、他方では AI によるフェイクニュースの危険性が社会問題になっている。AI のここ 10 年の進歩を振り返っただけでも、それだけすごいのだから、本作が描く近未来である 2065 年及び、その 5 年後の 2070 年、人間と AI が共存しているというニューアジアの世界は一体どんなもの？そこを見る、超進化型 AI アルフィーの姿に観客は度肝を抜かれること間違いないしだが、それ以外にも、日本が誇るハリウッド俳優・渡辺謙が演じるニューアジアのリーダーの 1 人であるハレンは人間ではなく AI だから、その姿にも注目！

『エクス・マキナ』（15 年）『シネマ 38』189 頁）は、美人女優アリシア・ヴィキヤンデルが主演した映画で、彼女の AI 姿もそれなりに美しかったが、AI のハレン役を演じる渡辺謙については、とりわけその左耳の周辺に注目したい。すべての情報はここら辺りで集中管理されているようだが、アルフィーに仕えながら、ニューアジアで AI と人間の共存を目指す彼の果たしている役割とは？

■■G7 による巨大 IT 支配への危機感は？■■

①2022 年 2 月 24 日に始まったロシアによるウクライナ侵攻、②2023 年 10 月 7 日に始まったハマスによるイスラエルへの大量のロケット弾攻撃とイスラエル軍による大反撃によって、世界は今、大きく二分されようとしている。これは、第二次世界大戦が始まる直前の、日独伊三国同盟による「枢軸国」と、米英仏ソ等による「連合国」との二極分化（対立）と似たような構図だ？すると、第五次中東戦争の危機はもとより、今や第三次世界大戦の危機が近づいているのでは？

そんな現状認識が叫ばれる昨今、近未来（2070 年）とはいえ、AI を敵視する米国を中心とする西欧諸国と、AI との共存を目指すニューアジアとの全面対決、全面戦争を描く本作の問題提起性は高い。そこで今、私たちに必要なことは、本作の影のヒロイン（？）ともいすべき、あどけない少女の姿をした超進化型 AI “アルフィー”に頼る“以外の方法”で、なんとか両極（両陣営）の対決、全面戦争を避ける術（すべ）を模索することだ。

そんな時代状況下、先進 7 か国（G7）の競争当局会合が開催され、去る 11 月 8 日、共同声明が採択された。そこでは、巨大 IT 企業による AI（人工知能）支配に対する当局の危機感が浮き彫りになり、巨大 IT 規制でも国際協力を強化する方針が打ち出され、G7 が結束して巨大 IT に対抗する姿勢が鮮明になった。さあ、AI 規制を巡る、今後の展開は？

■■アルフィーの正体は？彼女は破壊対象？それとも？■■

ジョシュアがハウエル大佐率いる部隊に参加したのは、妻のマヤがニューアジアの地でまだ生きているかもしれないと言われたため。また、彼らに与えられた任務は、ニューア

ジアが開発した兵器“アルファ・オー”の破壊と、その創造者“ニルマータ”的殺害だった。ところが、さまざまな戦闘の中でジョシュアの目に明らかになってきたのは、それらの説明は真っ赤な嘘だったということだ。

新兵器の創造者だと言われていた“ニルマータ”こそ、少女の姿をした超進化型AI“アルフィー”であったうえ、何とこのアルフィーは、マヤが生んだ子供・・・？ハウエル大佐はあくまで米軍の利益のみを代弁していたが、シミュラントながらニューアジアのリーダーとして君臨している男ハルンとの戦いの中で、少しづつ“人間とAIとの戦い”的意味がわかつてくると、ジョシュアはアルフィー殺害の任務を放棄し、今度は逆に、アルフィーを守り抜くことこそが自分の果たすべき役割だと確信することに。

その結果、スクリーン上で展開する激しい戦いは大きく変容していったが、いわば、太平洋戦争中の“神風特攻隊”とも言うべき、自走式の人間型自爆装置等まで登場してくるその戦いの結末は？

■□■1 本のレビューと2本のコラムは必読！■□■

本作のパンフレットには、村山章氏（映画ライター）の「ギャレス・エドワーズが探求する、失われゆく“人間性”的可能性」と題する REVIEW がある。これは、そのタイトル通り、本作のギャレス・エドワーズ監督についての、タイトル通りの、鋭く体系的な分析なので、これは必読！

さらに、本作のパンフレットには、栗原聰氏（慶應義塾大学理工学部教授/TEZUKA2023 総合プロデューサー）の「AIは自我を持てるのか？理想的な人間との関係とは」と題する COLUMN1 と、神武団四郎氏（映画ライター）の「時代や社会を映し出す、AI 映画の変遷」と題する COLUMN2 があるので、これも必読！

前者のコラムは、本作で渡辺謙が演じた、人間そっくりのアンドロイドであるシミュラント（模造人間）に注目し、「映画の中では彼らが社会の一員として人間と共存する未来世界が描かれた。急速に進化しながら社会に浸透しているAIは、シミュラントのように自我や感情を持つ新たな種を作り出せるのか？」という問題提起について、人工知能研究の第一人者で、AIとクリエイターのコラボで手塚治虫の新作を創る「TEZUKA2023」に参加している栗原氏に、「AI研究の現在地と、人間との関係について」語ってもらったものだ。

また、後者のコラムは、タイトル通り AI 映画の変遷を書き並べているが、これを読むと AI 映画がいかにたくさん作られてきたかがよくわかる。同コラムに書かれている作品の中で私が観たのは、『2001年宇宙の旅』（68年）、『スター・ウォーズ』シリーズ、『ブレードランナー』（82年）、『ブレードランナー2049』（17年）（『シネマ41』未掲載）、等は当然として、それ以外では、『A.I.』（01年）、『アイ、ロボット』（04年）（『シネマ6』142頁）、『エクス・マキナ』（15年）、『her 世界でひとつの彼女』（13年）（『シネマ33』269頁）くらいだから、もっとしっかり勉強しなくちゃ・・・。

2023（令和5）年11月13日記